

|          |                        |
|----------|------------------------|
| 氏名       | かめ やま よし あき<br>亀 山 佳 明 |
| 学位(専攻分野) | 博 士 (教育学)              |
| 学位記番号    | 論教博第88号                |
| 学位授与の日付  | 平成12年3月23日             |
| 学位授与の要件  | 学位規則第4条第2項該当           |
| 学位論文題目   | 子どもと悪の社会学的人間学          |

|        |                 |           |           |
|--------|-----------------|-----------|-----------|
| 論文調査委員 | (主査)<br>教授 竹内 洋 | 助教授 稲垣 恭子 | 助教授 矢野 智司 |
|--------|-----------------|-----------|-----------|

### 論 文 内 容 の 要 旨

本論文は、著者の過去十数年にわたる論稿を子どもと悪(うそ、性愛行動、暴力、自殺など)を焦点にして、三つの社会的概念つまり「社会化」「社会的アンビバレンス」「逸脱行動」のもとに統一的に再構成し、さらに社会制度の行為規定関係に傾斜しがちな定着論的な社会的思考に社会制度は人々の行動によって形成されるという生成論の視点を交えることによって新たな発展を試みたものである。

本論文の構成は、序論、第一部(「定着論と悪」)、第二部(生成論と悪)、第三部結論から構成されている。第一部においては、子どもの性愛行動、彷徨、うそ、秘密、暴力、自殺などの具体的な逸脱行動を取り扱っている。1章においては、社会構造と文化構造が矛盾する社会的アンビバレンスのケースとして、青少年の性愛をめぐる緊張と行動が性的アノミーとして分析され、個人主義的性愛とナルシスたちの性愛が腑分けされ、アイデンティティー論に依拠する近代的自我論が相対化されている。2章では地位群間と役割群間の矛盾を子どもと社会化の準拠者との関係で考察されている。ここでは母親と子どもを相補型相互作用パターン、父親と子どもを対称型相互作用パターンと位置づけながらもそれぞれがベイトソンのいう分裂生成の危険性をはらんでいるとして、それを防止し調節する機能をもつものが社会的オジの制度だとする。そして文学作品をもとに社会的オジの意味を具体的に描出している。3章では文化的価値の間に矛盾がある場合を子どもが示すうそやうそ行動をもとに考察し、道徳的な意味をもつうそ、防衛的な意味をもつうそ、遊びの意味をもつうそについて分析され、近代市民社会は人格の尊厳や自尊心という自律的人間を理念として掲げることによって正直モラルを要求するが、そのことが子どもたちにとって不可欠なうそに対して禁圧的な態度になり、結果として自律的人間の形成を裏切る形になるパラドックスを抽出している。4章と5章においては、近代社会の社会化の核心的なアンビバレンスである同一役割の相矛盾する期待が困惑から苦境になることによる子どもの暴力(けんか、体罰、対教師暴力、いじめ)と自殺について考察している。

以上の第一部が定着論を主軸としながら、人間学の視点をもりこんだものであるのに対し、第二部は生成論を主軸として自己というパーソナリティー・システムの破壊=創造、悪を含んだ再生が論じられる。6章ではサイバネティクス認識論などによりながら自己システムの破壊がエコ・システムを介して自己の組み替えがおこなわれる場合が考察されている。7章は6章の自己変容のコミュニケーション理論をふまえながら、子どもの社会化における秘密の意味について考察されている。最後に第三部結論(8章)においては、J.S.ミル(Mill, J.S.)の自伝の分析をもとに、ポスト・モダンの社会化である超社会化のありようについてふれ、デジタル知とアナログ知という知の二類型を析出しながら、アナログ知の単純な意味での回復ではなく、デジタル知とアナログ知の新しい次元でのバランスによる対抗相補性に可能性が託され結論とされている。

### 論 文 審 査 の 結 果 の 要 旨

『莊子』応帝王篇の末尾につきのような逸話がある。南海の帝と北海の帝は中央の帝の土地でときどき会合をもった。中央の帝である混沌は二人を手厚く遇した。二人は混沌の恩に報いようとして、相談した。人には七つの穴があるが、混沌にはそれがない。そこで一日にひとつずつ穴をあけてやることにした。七日たつと混沌は死んでしまった。この逸話にでてくる

「ひとつつつ穴をあけてやる」所作は近代的社会科学の分析・分解する知による生きられる経験の唯一性の破壊のメタファーと読めないだろうか。こうした分析・分解する知は、部分に分割できない「生成の論理」との対比で作田啓一氏によって「定着の論理」として、定式化された。「生成の論理」と「定着の論理」の対比はベルクソンの生の躍動の哲学とデュルケームの実証主義社会学との対比でとらえてもよい。本論文はこうした「生成の論理」と「定着の論理」という複眼的パースペクティブに立ちながら方法論や原理論としてだけでなく、子どもと悪という教育学的問題に照準しながら、しかも社会学の定着の論理に深くよりそいながら、粘り強く生成の世界に跳躍していくという、知的刺激に満ちた大変すぐれた業績である。

なかでも著者が子どもの、動揺、困惑、暴力、自殺などの不幸を考察するにあたってロバート・マートンの「社会学的アンビバレンス」に着目し、その枠組みをもとに分析を深化させ、しだいに定着の論理の可能性と限界の追求に及んでいく過程は、きわめて説得力に富んでいる。また著者は子どものこうした行動を逸脱行動ではなく、悪の行為とするが、社会学的思考の相対化つまり生成の論理への架橋のための有効な戦略的概念変換となっている。本論文の題目には社会学的人間学という言葉が使われているように、著者は社会学から人間学へという単純な、ということは安易な移行や対案を提唱しているのではない。あたらかぎり社会学的思考によりそって、生成論を浮かびあがらせようとしているのである。ここらあたりの著者の論理展開それ自体がプロセス論的、生成論的であり、高く評価されるところである。さらに、本論文では、質的データとして文学作品が数多く登場するが、古今東西の作品からの的確な選び方がなされ、感受性豊かな読解が示されている。著者の学識教養と生成論者ならではの才華をうかがわせるものである。

しかし、本論文にも気になる問題点がないわけではない。たとえば、本論文にみられる前近代社会と近代（市民）社会といった二項対立的社会像についてである。なるほどこうした社会像はゲマインシャフトやゲゼルシャフト概念と並んで社会学の伝統的つまり正統的概念ではあるが、近年の社会史の成果はこうした二分法的社会像を大きく揺るがしているからである。さらには英国の中流階級を産業社会に適合した階級としてだけみるみかたにもやや疑問が残るだろう。英国の中流階級は貴族・ジェントルマンなどの文化つまり非産業社会文化の影響を無視できないからである。さらにいえば、望蜀のきらいはあるが、ポスト・モダンの社会化に対しての著者の命名である超社会化の概念をもうすし敷衍したほうがよいのではないか、などとも思える。

このようにいくつかの問題点はあるが、すでに述べたように知的刺激にみちかつダイナミックな論理展開をもつ本論文の価値をいささかもそこなうものではない。社会学理論についての深い理解と独自の相対化をおこなった十年以上にわたる著者の篤実な研究は高く評価されるし、教育社会学のみならず、教育学、社会学への理論的・経験的研究への貢献もきわめて大きいと確信する。

よって、本論文は博士（教育学）の学位論文として価値あるものと認める。また平成12年1月17日論文内容とそれに関連した試問を行った結果合格と認めた。